歴史地震
第30号(2015) 232頁

［講演要旨］歴史災害調査と写真の活用

株式会社 防災地理調査　今村隆正

§1. はじめに

江戸時代等に発生した大規模な自然災害においては，絵図によるビジュアルな災害記録が残されているものも少なくない(例えば，高田地震や飛越地震による土砂災害など)．また，明治時代以降においては，写真による災害記録が出現する(例えば，十津川災害や濃尾地震による災害など)．当時の絵図は絵師が描き，写真は写真師が撮影した．

筆者は，防災調査の仕事と同時にフォトグラファーとしての仕事を行ってきたことから，歴史災害の調査においては，必ず絵図や写真に示された現場を確認し定点撮影を行い，災害現象の再現調査(被害状況や当時の人々の避難行動など)に取組んできた．

今回の発表では，これらの中からいくつかの事例を紹介したい．

§2. 飛越地震の災害絵図

飛越地震は，安政五年二月二十六日(1858.4.9)に発生し，現在の富山県と岐阜県の山間部に多数の山崩れによる災害を発生させた．特に立山カルデラで発生した大規模な山崩れ(鳶崩れ)は，常願寺川の最上流部を堰止め，決壊による土石流は富山平野に大災害をもたらした．

堰止めの決壊を予測し，調査隊が次々と鍬崎山に派遣された．そして，彼らが山頂から観察した状況は多くの絵図として残されている．彩色されたものからデッサン調のものまで様々な絵図が現存する．

鍬崎山山頂から撮影した現代の写真を基に，当時の調査隊が見たであろう風景を推定し，絵図に記された内容と，当時の情報伝達と避難行動などについて検討した．

図 1 「立山大鳶崩見取絵図」(杉本文書)と
絵図の視点から筆者が撮影した写真

§3. 十津川災害と中島喬木の写真

十津川災害は，明治22年(1889)8月18日から20日にかけて紀伊半島を縦断した台風により，奈良県十津川村をはじめ紀伊半島各地で夥しい山崩れが発生した災害である．十津川村では，この災害を機に2,600人以上が北海道へ移住した．

この時，重い大型カメラを担ぎ山を越え，災害現場の写真を撮影した写真師がいた．中島喬木である．中島の写真は，「吉野郡水災誌」の復刻版に30枚が収録されており，当時の災害状況を知るうえで大変貴重である．撮影地点図が存在しなく，湿潤な気候による植生の繁茂とダムによる地形改変などにより，正確な撮影地点を判明させるのは大変困難であるが，キャプションに記された字名と地元情報をもとに撮影地点を追跡し，大凡の地点までを特定した．

§4. 災害慰霊碑

全国各地に災害にまつわる慰霊碑が多く存在する．多数の犠牲者が発生した事実を後世へ伝えることが目的のはずである．しかし，地元住民でさえその存在を知らない場合も少なくない．また，石碑に記された記述内容の調査はされていても，慰霊碑が現在の生活環境のどの様な場所に位置しているのかを知る情報はほとんど見かけない．

図 2 北伊豆地震による奥野山の供養塔(左)
浜田地震による震災紀念之碑(右)

§5. おわりに

写真は，過去の災害状況やその後の事実や経過，そして現況を伝えるうえでも大変有効な手段である．また，防災意識向上においても大変効果的である．

今後も，先人が残した貴重な災害情報について，写真表現を活用し整理検討するとともに，歴史災害調査、防災教育等に役立てていく所存である．